



落葉樹の山を

川虫は訴える

日本の山 2022年を迎えた年頭にロシアとウクライナの戦争が起こるとは誰が予測していただろうか。春を越し、夏を送ろうとしている今日、各メディアから届く映像はウクライナの広く豊かな大地から立ちのぼる硝煙ばかりが主役となり、四方を海で囲まれている日本とは大きく異なる。

列島にいくつもの山脈を持ち、森から沁み出た水は小さな沢から大きな川となり、日本海と太平洋に注がれていく日本の地形。人寄せつけぬ原生林を保つ山や人々との暮らしに密着していた落葉樹の山、そして杉・檜に植林された山など、日本の山はさまざまな姿を私達に示している。かつては各地の林業家によって日本の森は守られてきたが、最近はその林業家の手足をも奪う法律改正がなされ、補助金に頼らねばならぬ体制となってしまう。

ゆったりウォークにて 4月29日、歩き始めてすぐの場所で知人と出会った。その人は林業家で、「循環の森プロジェクト」という理想を掲げ、自分の持ち山を黒木(杉・檜)だけではなく落葉樹も合わせて育てようと「森林資源計画」を作っている。それは三世代をまたいだ、文字通り世代を越えた森づくりのことで、山の木を一気に伐らず、森林を絶やすことなく、建築の需要に応じて伐採を決める自伐型林業を行っている。戦後植林された黒木が今、伐採の時期を迎えている。私達の回りでも伐り出された杉・檜を積んだトラックをよく見かけるようになった。知人の話では、栃木県の植林地の四分の一が日光と鹿沼にまたがる日光山系にあり、現在60年生の木を伐り出しているが80年生も入ってきているそうだ。一般建築向けには60年生が限度だが、大型建築の為の100年生は10パーセント、150年生は数パーセントしか需要がないのが現実とのこと。大木になればなるほど伐採のための大型機械が必要とされる。しかしその多くは森の仕組みも異なる外国からの輸入品が多いようだ。補助金の一部もその為に使われるのだろう。

水を生む山 将来にわたって山の木は守られていけるだろうか。水源涵養林・保安林とさ

れている山もあるのだが、手入れされぬままでは山が水を蓄えられない。保水力をなくした山は山崩れを招きやすく、水を溜める山として植える木の種類を変えていく必要があるようだ。「天然林を残し、奥山には落葉樹が必要。朽ちて分解されたその落ち葉からは、カルシウム・カリウムなどのミネラルを多く含んだ養分が水に溶け出て流れとなり、バクテリアをはじめ藻類・昆虫・魚類などを育てていく水質の川にしたい」と先述の林業家は思いを語ってくれた。

川虫は訴える 数年前から小学校の環境学習の一環として「生きもの調べ」をしている川がある。水生生物の種類から川の水質を知る方法で、子供達はもちろん大人でも楽しめるものだ。水質階級をIからIVに分け、Iが最もきれいな水に棲む生きもの達。この調査地点での川の水質階級は「I」なのだが、最近気になっているのは年々生きもの種類と数が減っているという事で、カジカガエルも減ってきているようだ。近年の雨の降り方はまさに異常気象のもたらすものであり、台風襲来などで川の形が変わってしまい、それにより棲みかを奪われた川虫達、石に付着する藻類やそれらを捕食する小さな生きもの達も一緒に流されてしまっている。そして山から下ってくる栄養分減少もその要因の一つだろう。植林された黒木の山からの栄養は乏しい。森が作る栄養豊かな水とは？ 生きものがたくさん見つかる川とは？—それは上流に落葉樹がある山。根を広く張りしっかりと雨を蓄えてくれるのも落葉樹だ。林業のあり方が問われてきている今日、せっかく育てた杉・檜がチップに回されることなく、日本の建材として活用される以外は落葉樹の山があってもいいのではないだろうか。私達の暮らしに潤いを持たせてくれるのが川虫・魚類・鳥類などの生きものとのつながりだろう。山に近い私達の街だから山に入って森の木々を仰ぎ、足許の川に足を浸して生きものを見つけよう。森から届く豊かな栄養は生態系の一部を担う川虫達を育てられるはずだ。彼らがたくさん棲む多くの川に、子供達を案内できる日が早く来ることを望みたい。(塚崎庸子)

参考図書:「森林で日本は蘇る」

白井裕子著 新潮新書

協力: 地元材木店

目次:

水を生む山と森に	1
地域循環型の経済が 私たちの命を守る道	2
春のゆったりウォーク 古の道をたどる	3 4
活動報告	4

定例会のお知らせ

毎月・第4金曜日

午後1時~2時

参加希望の方は会場・日時をお問い合わせください。

◆ ご協力お願い

毎月11日はイオンの「イエローシートキャンペーン」日です。半年に一度、シート合計金額の1%が登録団体にカードで寄贈されます。当会も登録しています。毎月11日のお買い物時には、「今市の水を守る市民の会」のボックスにシートを入れてくださるようご協力お願いします。(印刷用紙、プリンタインクなど)当会の活動に必要な品物を購入させていただきます。



古道「鎌倉街道」を歩く (ゆったりウォーク)

地域循環型の経済が 私たちの命を守る道

小山市で有機農業を地域ぐるみで推進する市有機農業推進協議会についての記事(下野22年8月14日付)を興味深く読んだ。同会は、国の「みどりの食糧戦略」を踏まえて、市の主導で有機農業推進の実施計画を策定し、同戦略の各種交付金を活用した事業を本年度から展開するという。

ここに出てくる農水省の「みどりの食料システム戦略」(以下「戦略」と略)について筆者はその内容をよく知らなかったが、鈴木宜弘氏(東大大学院農学生命科学研究科教授。専門は農業経済学)の著書①に、ここ数年の農水省の「転換ぶり」を解説した箇所があり、この戦略についても記されていたのでその辺りを参考に今後の食と農について少し考えてみたい。

鈴木氏によると、農水省の「転換」は実は2020年の「食糧農業・農村基本計画」(以下「計画」と略)から始まっていたという。この基本計画は5年ごとに出されている。前回の「計画」との大きな違いは農業の「担い手」の想定にあるという。具体的に言うと、2015年の計画での担い手は大規模農家や法人、企業家などが中心だったのに対して、今回の計画には、これに加えて「継続的に農地利用を行う中小規模の経営体(農家の意味—筆者注)」と「半農半X」(「半自給的な農業」とやりたい仕事を両立させる生き方)など多彩な農業経営を付け加えて、後継者不足で営農をあきらめかけている中小規模の農家が多い、我が国の現実により即したものになっているという。とすれば、確かにこれは注目すべき画期的な転換とも思えるが、鈴木氏は実際の政策にさらに具体的に結実するかどうかの見極めはこれからの事と慎重な判断をされている。

次に2021年の「戦略」のほうであるが、鈴木著①によると、欧米で進む、気候変動などへの対応のための農業のグリーン化戦略を受けて、世界の食料・農業グリーン化のルール作りに参画するためのものようだ。

農水省のホームページで「戦略」の概要を見てみると、EUの2020年5月の「ファームtoフォーク(農場から食卓まで)戦略」とアメリカの「農業イノベーション・アジェンダ」が挙げられている。その上で農水省はこれらと歩調を合わせるかのように、目標年次を2050年と大幅にずらした(EUは2030年)ものの、有機栽培面積を25%(100万ha)に拡大、化学農薬5割減、化学肥料3割減というEUとほぼ同じ画期的な目標値を打ち出したのである。

こうした農水省の「計画」における「転換」の意味を鈴木氏は次のように解説されている。「長期の目標なので、総論賛成はできた側面はあるが、農水省内の異論も克服され、農水省、農薬企業、農協が長期的な方向性について世界潮流への対応(代替農薬、代替肥料へのシフト)の必要性の認識を共有し、大きな目標に向けて取り組むことに合意できた意義は大きい。化学肥料原料のリン酸、カリウムが100パーセント輸入依存であることも肥料の有機化の必要性を認識させることになった。」(①p209)しかし大きな懸念もあるという。今後の代替農薬の主役は害虫の遺伝子の働きを止めてしまうRNA農薬というもので、す

でバイオ産業で開発が進んでいる。遺伝子操作の一種であるこうした農薬やゲノム編集などが有機栽培に認められないかという点である(①p210)。

鈴木氏は今回の「戦略」の策定は、「新基本計画に多様な経営体の重要性を復活させた人々によっておこなわれており、『大規模化のための技術でなく…だれでも農業ができる技術を普及することで、農業や有機農業のすそ野を広げ、農村に人を呼び込めるようにしたい』という意図が示されている。」として、その具体例として、有機稲作での「抑草法」(二度代掻き、成苗1本植えなど、雑草の整理を科学的に把握したうえでの農法)などの普及の重要性を挙げている(①p211)。こうした技術の多くは上三川町にあるNPO法人民間稲作研究所の故稲葉光國氏たちが開発されたものであり、筆者は本通信48号などにおいてその農法を簡単に紹介した。昨年近隣の方が稲葉さんたちの農法を実践し始め、除草のために水田の中には一度も入らずに収穫できる様子を自らの目で確認することもできた。今回の戦略において、その実績と優秀性が認められたようであるのは心強い。(写真は稲葉著②)

一方で日本の低い食料自給率では何らかの原因で各国の輸出規制や物流停止が広がっていけば、飢餓に直面する可能性が、想像以上に早まることも十分考えられることである。また鈴木氏は、「種を握ったグローバル種子農薬企業は種と農薬をセットで買わせ、できた農産物を全量買い取り、販売ルートは確保するという形で農家を囲い込もうとしており、この「囲い込み」に飲み込まれてしまうことは地域の食料生産・流通・消費が企業の「支配下」に置かれることを意味する。」として地域循環型の経済こそ私たちの命を守る道だと提唱されている。少々長くなるが引用して結論に変えたい。

「食糧は命の源であり、その源は種である。私たちは地域で育んできた大事な種を守り、改良し、育て、地域の安全・安心な食と食文化を守るために結束するときである。地域の多様な種を守り、活用し、循環させ、食文化の維持と食料の安全保障につなげるために、シードバンク、参加型認証システム、有機給食などで種の保存・利用活動を支えることが必要となる。そして、育種家・採種農家・栽培農家・消費者がともに繁栄できる地域の構成員の連帯と、公共的な支援の枠組みの具体化が急がれている。」(鈴木著①p214) (文責・森)

参考図書

- ①「農業消滅—農政の失敗が招く国家存亡の危機」
鈴木宜弘著 (平凡社新書2021年刊)
- ②「無農薬・有機のイネづくり」
稲葉光國 著 (農文協2007年刊)



ゆったりウォーク 古の道をたどる

鎌倉街道と例幣使街道 2022/板橋・明神編

4月29日(金) 午前9時、日光市上板橋集落センター集合。
約6km をゆったり歩きました。

上板橋集落センター ⇒ JR日光線西側の農道 ⇒ 例幣使街道徒歩道 ⇒ 日本チョコレート工業協同組合 ⇒ 農道 ⇒ 湧水地 ⇒ 鎌倉街道 ⇒ 明神保育園前 ⇒ 板橋の交差点 ⇒ 出発地(約6kmのコース)

「日光市民活動支援センター」スタッフのかたが取材のため参加。ゆったりウォークが支援センター情報誌「にこっと！」に掲載されました。許可をいただき、ここに転載します。

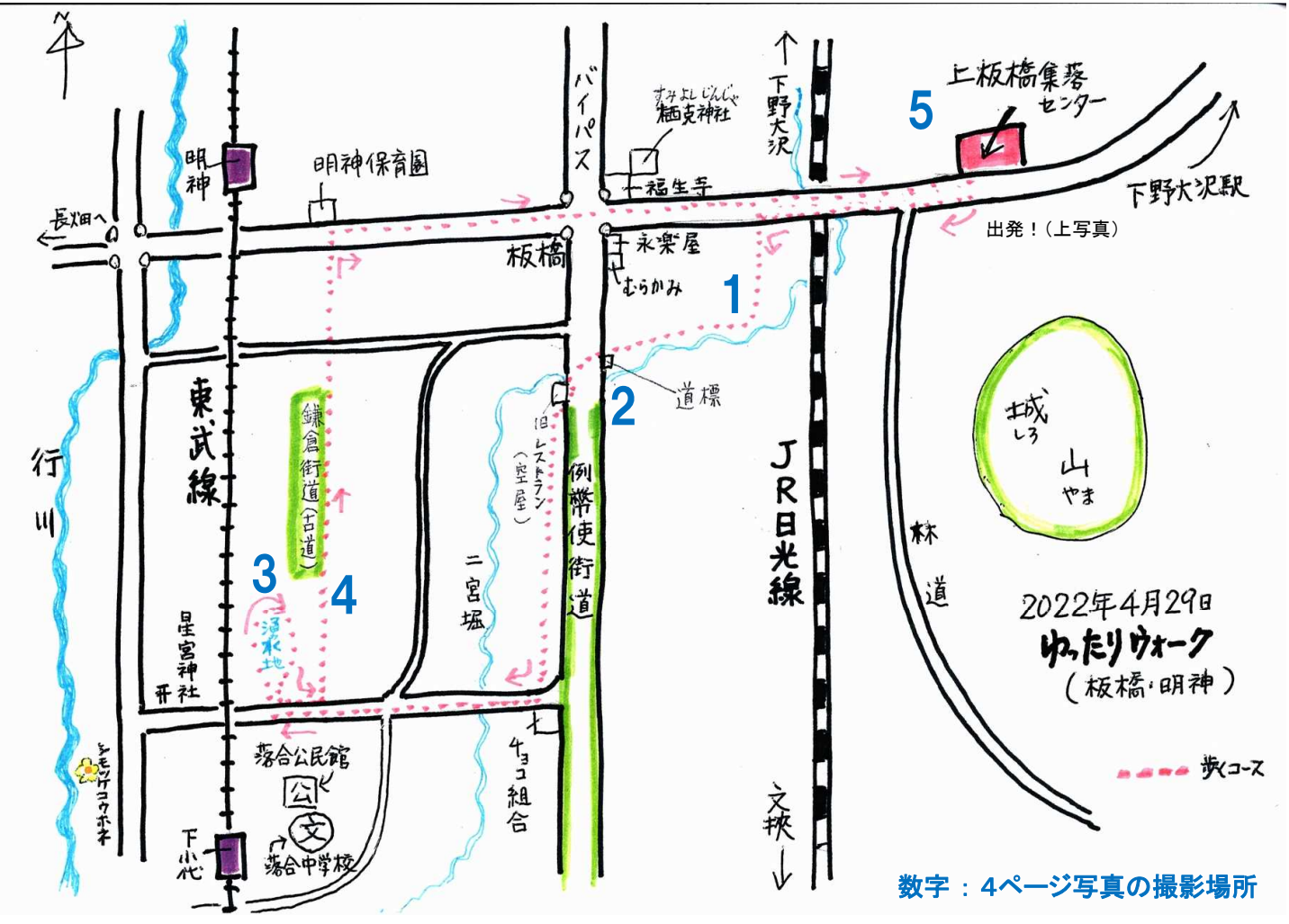
今回は、鎌倉街道、例幣使街道の散策と、道中にある湧水地の散策で総勢15名の参加でした！参加時に配布された地図はすべて手書きで、温かみと会の熱量を感じました。上板橋集落センターからスタートし、道中に当時の地域ネタや豆知識を聞きながら散策することができ、地域のお話は、事前に開催場所を散策しながら地元の方に聞き取りを行ったそうです。道のりは6キロほどで鳥のさえずりを聞きながら例幣使街道を歩き、途中「チョコレート工場」の誘惑もありつつ山道を進み、湧水地、鎌倉街道の歴史についてお話を聞きながら散策することができました。今回参加させていただき、私の知らない今市地域を見ることができました。また参加させてください。ありがとうございました。(市民活動支援情報誌「にこっと！」2022年6月号より転載)



上板橋集落センターから出発！

参加者のみなさまからの感想です。

- ◎ 知らない道、発見の道、勉強になりました。季節的に新緑がきれいので気持ち良く歩くことができました。次回も参加しますので声掛けをお願いします。ありがとうございます。
- ◎ 湧水、涸れていて残念でした。普段見る事ができない所を歩くのも、たまにはいいですね。車でスーと通ってしまっではもったいない。疲れた。
- ◎ 新緑の素晴らしいコースでした。鎌倉街道、また歩きたいです。
- ◎ 近くに住んでいても知らない事ばかりでしたが、お陰様で一寸知識が増えました。連休の一つに古道を歩いたことが良い思い出になりました。また参加できたらと思いました。ありがとうございます。
- ◎ 歴史の道を歩き、街道の花にも心を惹かれ、さわやかな一日でした。また新しい発見、期待しています。
- ◎ 下見から改善されて充分満足できる行程だった。1000年の道、貴重な所を歩けた。
- ◎ 歴史の道を初めて歩きました。又、参加させて下さい。
- ◎ 参加者と交流しながら散策でき、楽しかったです。実際に歩き、自分の知らない今市を知ることができました。



活動報告・2022年

- 4月22日（金）定例会
- 4月29日（金）ゆったりウォーク
- 5月27日（金）定例会
- 7月22日（金）定例会
- 8月26日（金）定例会



いにしえ

ゆったりウォーク 古の道をたどる・写真集

だいや川通信
第 53 号



郵便振替口座 00140-4-535550
〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方
今市の水を守る市民の会
0288-27-2183 (8時～17時:森)
0288-26-3324 (17時～21時:塚崎)
<http://www.somesing.net/daiyagawa/>



1



2

日光線脇の農道 ↑
ちょっと立ち止まり、
足元の草花(上写真)を
観察する。徒歩ならで
はの楽しみです。

← **例幣使街道 道標**
「板橋まで1里」
街道を自動車では走る
だけでは気にもとめない
標識。小さな祠に手
を合わせる人も。



5

さあ、「鎌倉街道」を明神地区まで歩きます →
50年ほど前に植林された杉やヒノキに挟まれた道。
かつては雑木林に囲まれていた街道を、鎌倉武士が南へと
馬を馳せた姿を想像しながら、歴史散歩を楽しみました。

↓ **湧水地**
残念ながらこの時期、湧水による池は見られませんでした。
草むらをゆっくり歩いて周辺の様子を観察しました。



3



4

編集後記

誰が考えたのか鹿沼の南摩川に巨大ダムを建設するという「思川事業」が始まったのは半世紀も前のこと。南摩川は飛び越えられるくらいの小さな川です。ダムに貯める水は無い。ならばどこから水を持ってくればよいと、水の豊かな今市が狙われました。大谷川左岸の松原公園あたりから南へ20km、まっすぐな線を引き、地下に直径5mの導水管を建設するという「大谷川取水」。無茶苦茶な計画です。許せば自然環境や農業に破壊的な影響がある■旧今市市では「反対期成同盟」が立ち上がりました。同盟を補完し、大谷川取水・思川事業に反対する意思表示の場として、本会は2000年に発足し、署名運動や「川むしたんけん隊」など市民向けのイベントを行いました。同年11月、大谷川取水は中止になりましたが、南摩ダム計画は近くの川から水をもらうなど、姑息な変更を重ね、膨大な予算を使いながらダム本体の建設を進めています■思えば「水の会」に参加したのは、自然と人の関わりを考えようと足を運んだ20数年前の講演会がきっかけでした。この時期、大谷川取水反対で結集し運動の中心となった先人たちは、反対の根拠となる多くの資料を集め、勉強会を重ねたそうです。当時の様子を何うなかで、文書や写真などの記録は残っているが「今後どう保存していこうか」という心配の言葉も聞かれます。紙でもデジタルでもデータは適切かつ永続的な管理の仕組みがなければ、時間とともに消滅していきます。「文書や資料を残す」ことは煩惱のひとつかなと思いながら、独立した権限を持つ「市民活動記録保管所」を妄想したりもします。(T)